共古日録

特別
15
1413
8

特
門 45
號 1413
卷 8

發結庶　神奈川縣内の神佛緣日

早稲田大學圖書館
昭和25.10.24
購入

共古之印

曹谷の貝塚
亂毒の井
一達特寫

下總國[illegible]郡[illegible]村東方半里曹谷と云ふ地に貝塚あり

[illegible]と見て亂毒を恐れし形[illegible]

[illegible]

[illegible]

の春迎多く石碑となりて立ち

大鳥羽の歌

大鳥羽の歌

忘れんと思ひ思ひて思ひ出でて思ひ出でて思ひ出で

寶六貫の銭貨

古寛永の筆者

寶六貫と通称する銭貨は勝西にて立せりとす
寛永通宝銭筆者三人信楽大納言藤原朝臣和と
あり即寛永十五年十月三日迄造出せる古雲院殿
銭貨方字の一分なりとす

甲斐の古銭家

甲斐にて古泉家としてもっとも著

甲斐 泉所 藤谷氏
八日所 遠清
同所 勢恵亨
同上 講古堂
同 千嚴堂
所名不詳 東屋氏

以上古泉家の出し人世一年以前迄にて著す

又 緑所四辺豊明張氏又古泉つとめ
人古泉家なり と云へれども其の甲斐に行せり此の古銭を
所に二年居住の人銭せる者なり こんとそれ別所なり

遠江磐田郡の菊芋

遠江磐田郡御厨村の畑にて大正四年頃
しとて菊芋と云ふ菊芋と大足跡の所にもあり
菊芋とは其の葉ちら俗アルコリ東禅寺内に植へあるを
馬鈴薯と持ちけるなり 原産地は北アメリカ
ブラジルの高原

三成いカズシゲ

甲州国一分四方の高原の者に石田三成の用筆假名
文数通あり と云へれいカズシゲとあり 又津軽にある假名文
にいカズシゲとあれが三成はわがしげと清むべきなり

梅と梅

雪消れば日毎に追れけり 何の梅日も開るなるべし
此句は日毎の二字とあるは古今の木数の二字の梅と同じ
考へたる歟

火遊びの時代

秋葉祭に火遊びとて子あり 此の歌は唱の語バージュンなる
者の元祖中にて此の梅を焼して其上を考むるを例とせり

猫の目の月次

猫を土窟に生れたれば月次とすべしに十七夜もしくは十五夜こそ
[illegible]と[illegible]又其次[illegible]

古茶釜

[illegible]ふ[illegible]
[illegible]有[illegible]
[illegible]

山陽と鐵舟の銘書

[illegible]
[illegible]書[illegible]山陽の銘[illegible]
銘書の墓志銘[illegible]
[illegible]書[illegible]

山陽自筆の銘文

山陽鐵舟の[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

布袋の石盤

ここに記す農家の者ども、朱丸を込めずとて、ふんどしを引き、ふんどしに成るとて、雜司ヶ谷高田穴八幡境内布袋形水盤

古鐘銘

先立鐘銘

八月九日立心鐘
幢院鳴鐘天安二年
比叡山延暦寺西寶

千社札の始れ

武弾の一刀彫

大永の頃

[illegible]千社札の始れ

[illegible]千社札始れ[illegible]

天人の画、[illegible]天女[illegible]

[illegible]

武弾の一刀彫の意匠

[illegible]

[illegible]

大永の頃に

[illegible]

料理之書

調理書六冊と題の料理の本を田安徳川家蔵書

猪鼎の図

とある分の山王の猪鼎の図

或年將軍上洛の為或つも

ありしなり此の所の雨落に

所が猪とる事なり乃ち所が康誠鳥とる

松浦家世伝の松浦肥前守隆信の右持

されし鉄製猪鼎と同じ

形の下図のなり

鉄車砲図

大砲乃

元和三年正月廿六日と刻しある用粉

元和三年の唐車

日粉三猪と刻せり唐車

寶鐸図

寶鐸五枚

寶鐸五枚

寶鐸二枚出土せり又二

とある

寶鐸

寶鐸

寶鐸

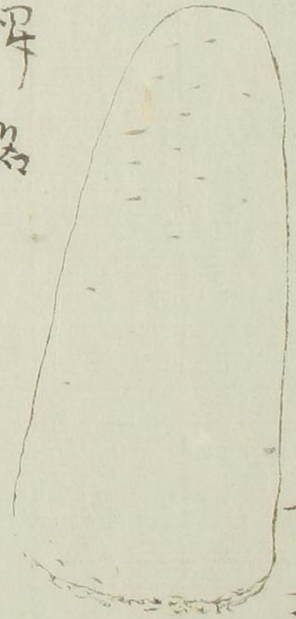
又気多に近き光明寺とて 三間四の破片を弱
[illegible]
[illegible]
[illegible]

故佐角半十郎父母墓創建年月不詳 文政三庚辰

宮城郡牡鹿郡寄村の碑銘

宮城郡牡鹿郡寄村の碑銘

多福神院春崇後堤[illegible]帝之御神靈碑則帝八皇子成恩敬王並北面左田野[illegible]下之天皇崩御及新王承繼[illegible]建常山土谷世[illegible]迎元二年[illegible]帝都左兵衛尉[illegible]則人皇九十七代光明院曆應元年也時[illegible]曆應元年八月[illegible]天皇崩御曆應元年八月[illegible]二十四日或曰十三日也當山御神靈碑霜月二十四日是則御供養建新神靈碑月日[illegible]



宮大

東都稲荷の碑

東都稲荷の碑

皇子大明神　朝倉稲荷　熱田神社

御祈願　大門崎　殿原小路

札立場　未詳里

其詳而里人可知

右之碑傍の立ちたるものなり

東都稲荷の碑

ここに名物三つあり伊勢屋犬の糞稲荷の社と何れも著名なるが明和の頃より寛政の中比迄の間に名物と云ひしを今はこれを一日に千社と云ふ稲荷の千社詣りとて諸人毎年詣りて賑ふなり

右之碑傍の立ちたるものなり

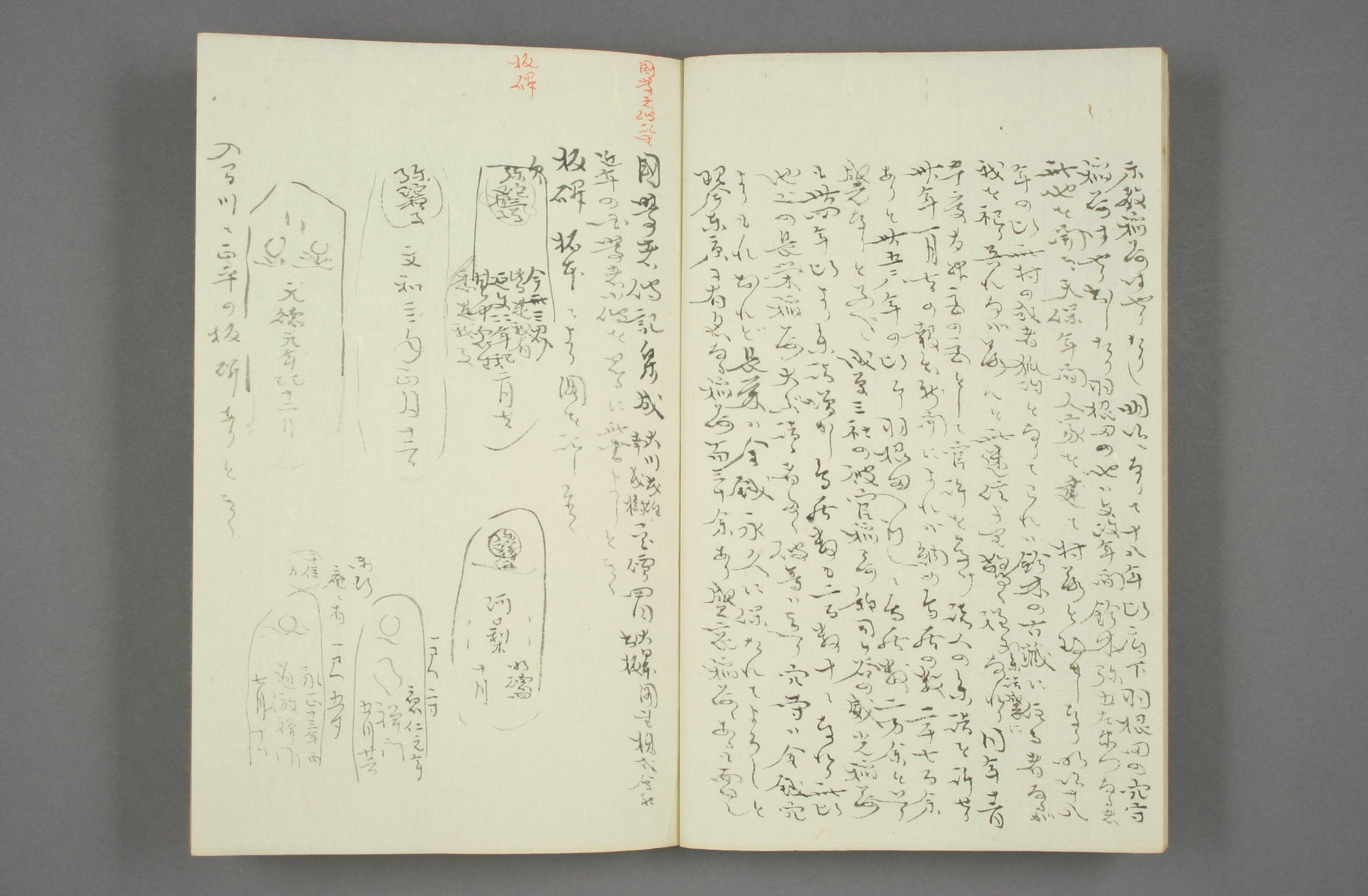
東都稲荷の碑

ここに名物三つあり伊勢屋犬の糞稲荷の社と何れも著名なるが明和の頃より寛政の中比迄の間に名物と云ひしを今はこれを一日に千社と云ふ稲荷の千社詣りとて諸人毎年詣りて賑ふなり

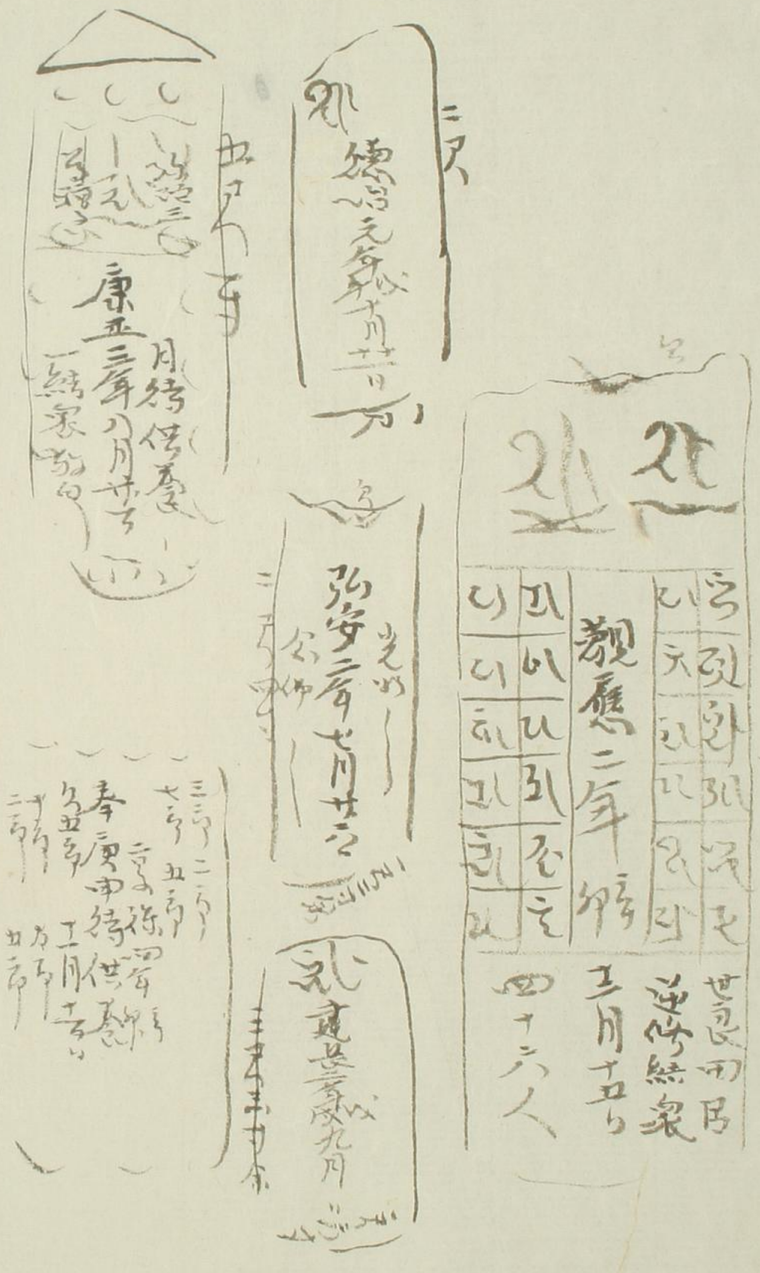
稲荷の社の名数千人と云ふ事なるべし

多くの稲荷社あるのも社稷の
明和の初年にこの年中二三人あり一人は武蔵神田の
柳屋仁平次の娘ふじとて
鏡屋の娘せんとて
絵みて一枚の茶とのちまきを
明和六年男踊天下に流行
三方ちの人の浮別あり
神奥さまりてあしがわ
男寅わたまりて
石のかせ嬢ずも行
さいせんのうれすれ
とつてがすやうなり

今所の者ちこれが今回の
命し後ち当流行稲荷と信仰し今所
輕ちひろまり苟和今回の稲荷疱瘡
ちり赤幟を家に持て代参の
や今回の流行は知初年のしより天明寛政の初年
世年間まであし寛政五年
ちなりこれいてこの稲荷の流行
ひしまり成家ちの太夫
迄ますや天保十一年ひこかや
下谷和吉者のはちまち
つぬこ中志谷の子孫
今所の者ちこれが今回の流行と信仰し今所
命し後ち当流行稲荷と祀せり 武稲荷疱瘡
輕ちひろまり苟和今回の稲荷疱瘡
ちり赤幟を家に持て代参の
や今回の流行は知初年のしより天明寛政の初年
世年間まであし寛政五年
ちなりこれいてこの稲荷の流行
ひしまり成家ちの太夫
迄ますや天保十一年ひこかや
下谷和吉者のはちまち
つぬこ中志谷の子孫



（常陸か）の国太田宝蔵寺に二枚建塔の板碑あると聞く



猫瞳寛穴

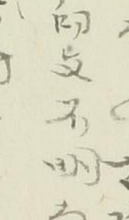
猫の瞳と云せ

神社　平安時代川夏北方面美

世事の如く電光の義を覚の猫の目のごとくなるを

常に古銅を見るに必ずしも古陶器を押印あり何人なるか明なれども

古陶器



山東省兗州府の古

えなるべし

豊前都留野　三苫村字住吉に貝塚あり無釉の器

焼物器物　陸奥の国相馬郡の小浜に石鏃あると

石鏃

高田瓦焼窯　高田瓦焼窯の跡

焼物の跡

馬首を祭る

山村座芝居面　馬の首を祭りあるを

三ツ角形　屋敷

再板　刀を持て男鹿あり

鉄鐔面　鉄の鐔

屋敷

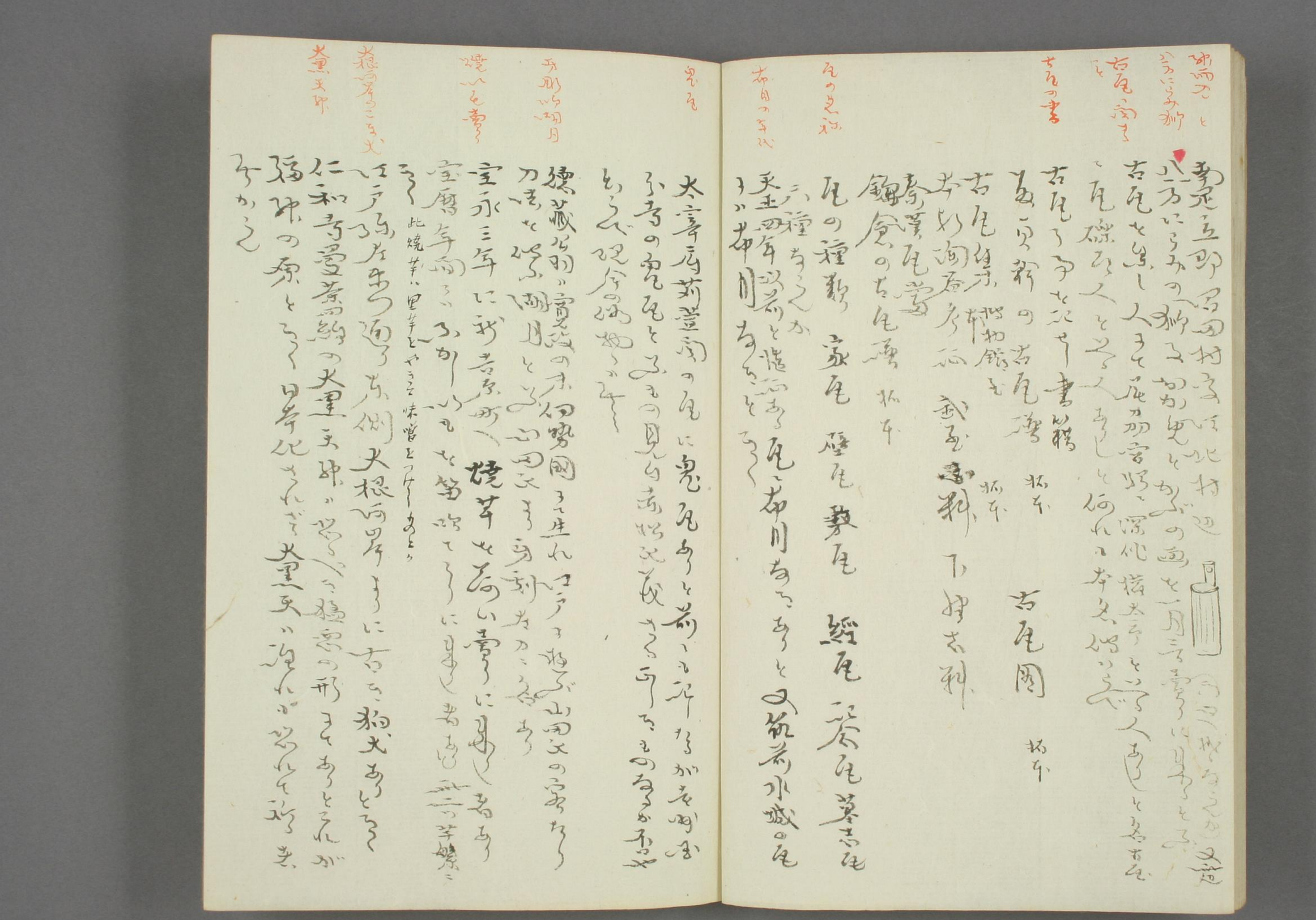
大形のもの

京都

五井戸

泉屋

鉄面鉄



[illegible]

[illegible]

[illegible]

お狸様

お狸様といさき山怨の狸と名づけ布団に寄ぬ猫を殺すを祟りとなす事あり

と紀州藩に於ては下谷の徒町に日蓮宗の寺院多し細井とゝ墓の所に近き柳原柳原

信楽焼

信楽焼 特山 とろろ焼 志摩 朝日焼 鷹羽焼 鷹羽

明治年間墓

四谷西念寺 服部半蔵の墓 石碑 慶長元和年間 寛永年間

信濃国佐久郡 服部半蔵 墓 石碑 高さ三尺 正面に安養西念大禅定門と刻し 右側に 代々の墓の中央にあり 百年来の墓石なりと

銀和同出土

銅板 天保銭

大和国佐保山 銀和同銭一文六分の用あり

長崎寛永の銅の板 天保銭に ⊕ の極印あり と世俗唐寺と称する

特別展覧会の古銅器

特別展覧会に到る

明治六年四月特別展覧会に到る

卿紐造の古瓦の鍍金経筒あり

寛弘四年丁未八月 藤原朝臣道長金峰山奉納経筒六個の内

銘

右銘奉納の文字もこの内も古文にあらず筒の内面青色の金色もなし古瓦の鍍金は卿紐の京師に著さるゝ卿紐と謂ふべし

支那古銅器の鑑定家のいふ所にあらざるも

田中光顕氏出品の鍍金丸壺あり

是亦内面青銅錆あるの類偽古物なり

近年偽古物頗る巧妙にして鍍金経筒壺数多く見るなり

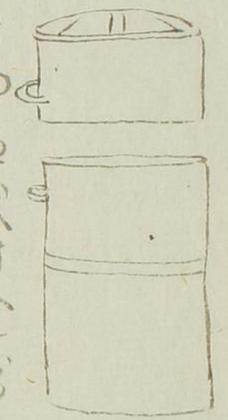
予が他に到る所見る所にて青銅錆を鍍金の面に

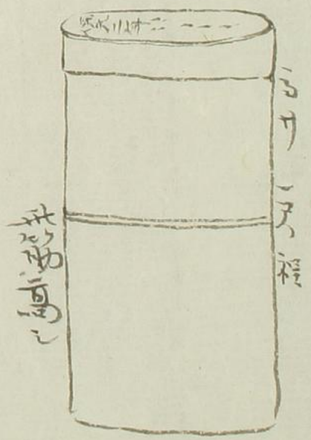
すの類多くして古銅器の古色なく身のからくり見

[illegible]鑄物師の鑄弘[illegible]
[illegible]鑄物師義に鑄[illegible]
[illegible]
[illegible]

信濃國拓科郡城城村發掘
ハ之の銘　　博物館藏

保元二年丁丑九月二日定西

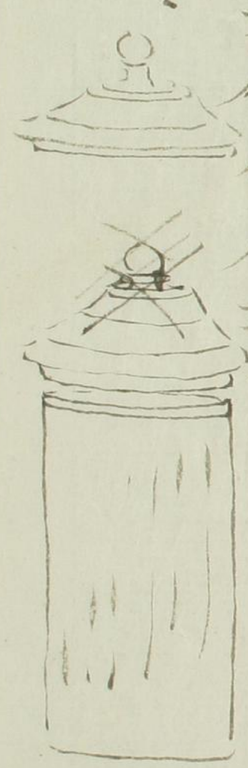




山城國綴喜郡八幡町大字八幡字上ヶ地字ヶ谷ヨリ發掘
經筒銘

敬白大中臣右國奉加如去經筒結緣
人々願僧勢助僧定勝僧原範僧永原
僧定實僧為行業僧慶勝僧善響

博物館藏



僧原業僧行命僧聖二藤原季原二林
胡次史野部次僧僧觀藤井國友僧善
國三御所僧永尊文屋次正道次正野
尊友中原依貞僧朝快僧連如範
右奉加之志為大道家生成佛得道
各道俗男女所奉加如右
永久四年二月廿八日敬白

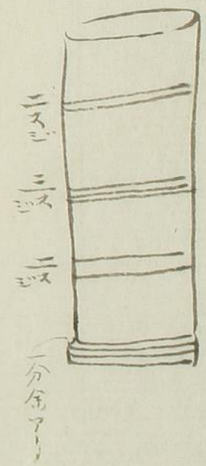
藤原女僧慶運　文屋國末安部國安
僧定慶僧慶秀

山田鉦次經筒銘

皆共成佛道

元弘三年
癸酉十月十五日

僧春然

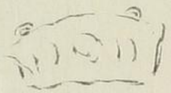


經筒古色製作不可偽古物也

大和國生駒郡高生駒村大字菊屋敷字
美努岡萬葬誌　銅版　天平二年のものと
銘あり　物部義
中村又六次義經筒あり　寛治三年の年号あり面白き
同次郎二素鼎あり銘後期と見る

同次の義二素常鼎あり内面鑄色使細青銅鑄出最古
見る又六神鏡あり製作精巧使鑑あり
片野邑平次義　伊豆常行堂磬銘

伊豆御山
常行堂磬



表面風風向い合いた模様あり

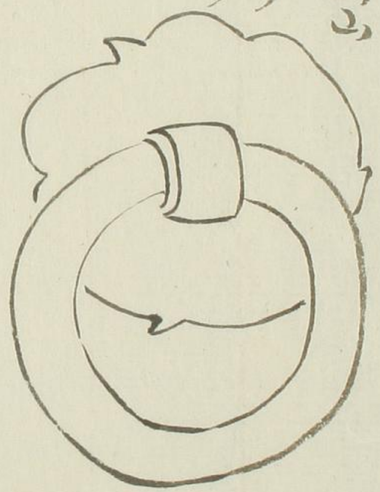
裏　保元年　癸酉
拾貳月拾壽日
檢非違使左衛門
少尉藤原朝臣光貞

此の筋のあとあり

磬は今百年表こもたるものなるが富物をもてに銅の表面
那銘亮文字ちさらなる跡見の如て鍍金せるのまて
那ちていこのこのあまてはれたものと思ふ

川口の藏に金銅塔鈴あり 清位寺こゝの鈴文あり
唱西新新文あれども清位山あれと清位寺あり
これ元仏物なり 幾所と
三時色 川口義 鏡金 香爐
白色青錆不見 此物古物なり

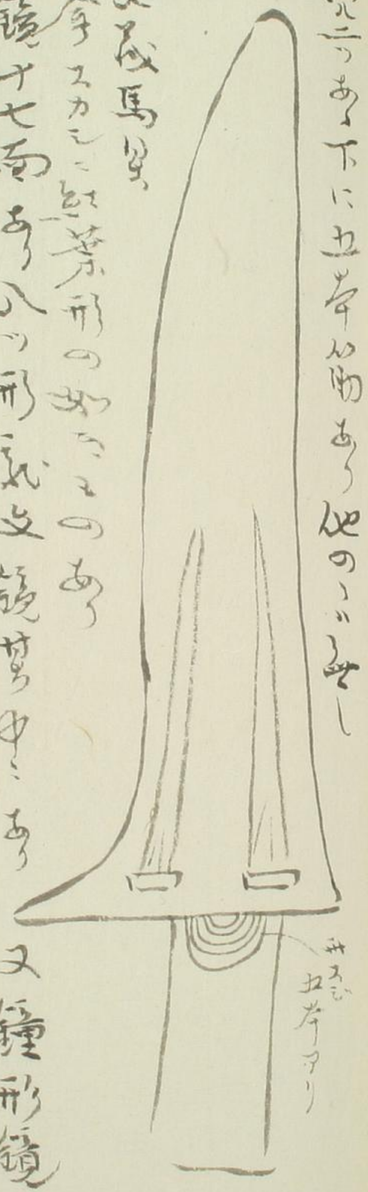
大和国郡船倉山
松山 城山 鏡金
大環 六個



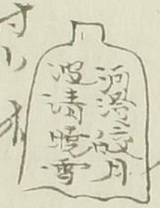
仏物鏡

風爐

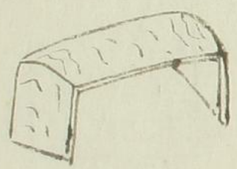
神饌木棺なり 何なるものか
木面蓄耕 川口義 銅鐸 二本 二本 中月 針完

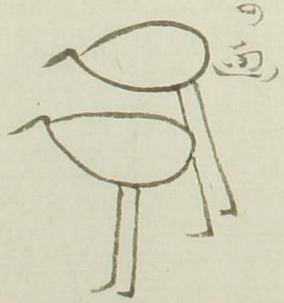


川口義馬具
鏡金スカシ紋菊形の如きもの
古鏡十七面あり八つ形式文
あり下の如き飾あり



又鐘形鏡



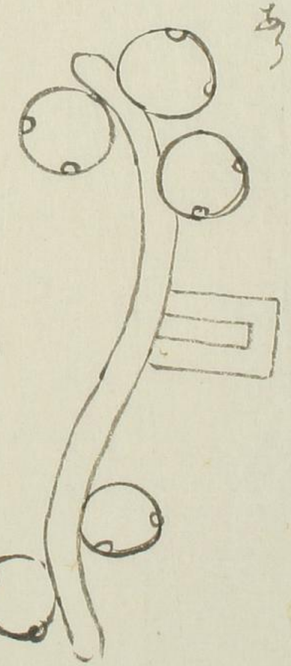


銅鐸の面

書き玉 川口 田郡 也村小林
鳥尾小弥太 川口義 古銅几
鑄物 仏世古色 小形机あり
仏前 備 ものなり
支那 古物なり

田中光顯氏藏
博山香爐ノ
渡金古色佳

嘉納治兵衛氏藏ノ渡金火舎
同氏ノ地鈴ニテアリ
形式如何



稲生眞履氏藏香水杓ト云長柄ノ杓ナリ 寶宗法用

ヨクのものか銅鍍世古色佳ナリ柄ハ銅製ナリ

永一
八月
寶之五年
二月

[illegible]高橋三郎氏藏饕餮卣ハ白銅製ニテ鑄型ノ上物
[illegible]ナリ古色美佳傳世ニテ用ユル型ナリト安價ナリ
三[illegible]氏藏古銅壺ナリ青銹銅壺ナリ
一種ノ青色アリ
[illegible]氏藏古銅壺ナリ
[illegible]氏藏古銅壺ナリ青銹紺青銹壺類ニテ面白
[illegible]支那物ナリ
任友吉左衛門氏藏古銅壺ハ金國氏及ビ者ニテカラシ出品ス
[illegible]何ニモ支那古銅ニテ珍書ノモノナルガ安カト思ヘンモノモ有
唐代紀[illegible]青銹七宝[illegible]面白カラズ
唐瑞獸葡萄鏡 銹層ヲナス 青色見事ナリ
唐雲孔鏡 八ツ形 法隆寺藏スル鏡ト同型ナリ

漢双龍鐘

漢鑾　青銹朱斑アリ

水中古ヨリ

漢蓋方彝　青銹白銅色ヨリ

周饕餮紋卣　青銹水中古色

周魚卣　青朱斑　佳ヨリ

周諸姬簋　水中　古ヨリ銅色白シ

漢金翁壺　青色殊更ノ斑点ノ如シ

漢饕餮紋壺　青綠七宝色不佳

以上月ヽトマリヽヽヽ　如ヽ蓋ヽヽヽヽ　ヽヽヽヽ刻ヽヽヨキヽヽヽヽ

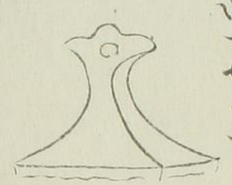
古器

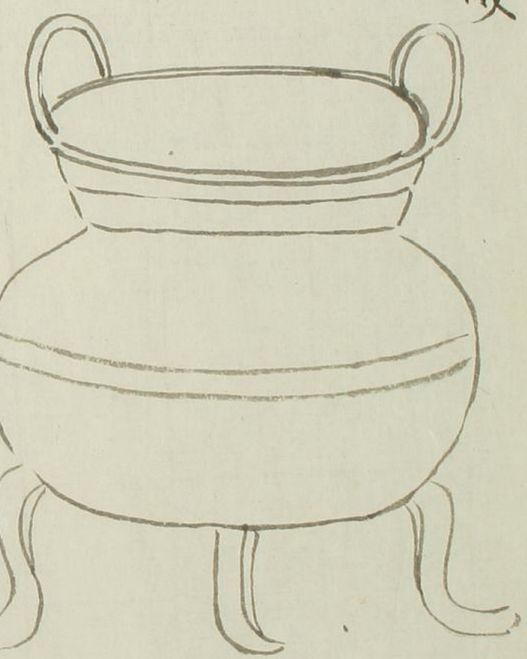
刈田磬印

京川米庵田藏

黄素文鼎

米庵田藏本
火型之銘義
十八字
十行本より





青山堂田藏の古京刈田磬と
京かんみ年二月
いたりの同じ物なれども
ともとなりなし為失さ

加部つみ五

橘茅と白田の場の橘茅とそ
うめ　あるうにつみてもこの事
或は橘ヨモギ　ちんぬ　ちく

後やもちにつくる

郷里新誌

御里新誌ニ云ク　毎八木ヒ乃公羽美
書ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
人近辺の地理及伝説ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
相馬小田原藩勝寺（寺印四方ニアリ）
諫屑公資暇録ニ五代持福書ニ印ヤ　○臨印

易服寺

（印）

十月ヒ

十月ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ

元禄四年乃ヒ月　吉日　大孝
大仏鳥所　三ヶ月　鐘　形南枝　鋳師　菱川吉兵衛

東京ヒ　ヒ　ヒ　ヒ

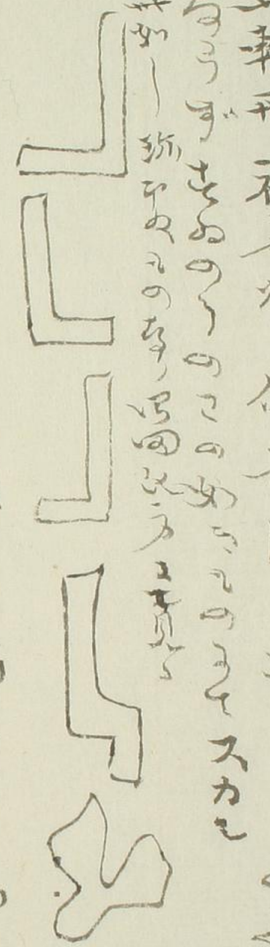
多賀城碑

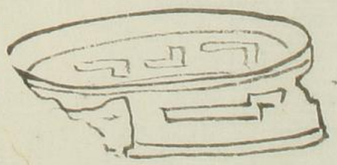
節茅月の　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
文籍志乃四十ニ　多賀城　碑　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ

嘉永十八年の文寛永

寛永通宝鋳型

田中義成氏の説によれば寛文五年聖護寺入寺
寛永通宝鋳型背文の正にアの字あり文久元年より
二ヶ年アの字を鋳アイヅの頭字とす
輪形祝部焼い備前国にあり何の用なるや詳
ならず其の形の如きものにスカシ
如し





スカシの祝部焼

幕末諸国鋳

箱鐘直径六寸高さ二寸の内外二段三年鋳造八形の鐘
文久二年鋳造の鐘
文久元年の文久二年より
文久年代に改元
文久年代に改元

元治元年に鋳造せられ
拓本の如き用ひられ
文久元年
文久元年
文久元年

棒山の名見せしところ

棒山社に見世の事 と題せり書 橋本白雨著と
弾正の文物所に遺載し ていとおしきものと法師人のこと
ものとなり

彫刻の碑文

下野国天明郷菅神に創立の碑 に顔真卿の筆
天明二年に建し

巻書院蔵書

由来 巻書院の蔵に顔真卿の筆 伝帖あり

ダイダラボッチ

一説 アガタとも也 大人の足跡高き山上にあり と平岡
村とも也 ダイダボッチの跡ありとも

昔の椎塚 ダイダイ坊の伝説ありとも

山城 橋大夫打 鋳成場の跡 元文寛永の鋳成也

元文寛永の銭

千生仏仲の面 仏工定紀の仏と伝説せり 書二百枚あり
也年書わり刻りやーしりけり

千生仏仲の面

昔古銭の銭 弾正 銭板 一分重サ十八匁

銭板背に刻ヒテ

銭板 一分 文 あり 文 あり 一覧セ
しが

故元国御史葦按察司義文公霊

三寸一分

元朝成宗元貞元年十月日歿
日本永仁三年於駿河国清里
俗名曹吉姫
享年三十有七

元銭解 弾正 もの 里 物 物 あり

本朝銭重量

本朝銭重量
笹手和同銭銭 一匁三分四厘 (中外政史の記和)
大二分 一匁四分二厘
筑前国山田郡南と云銭銅銭有
薩州中原 当家 銭 石山出土 銭 銭 あり
萬年重大なるもの 一匁六分 最小量 七分

力神切五枚　三分ヨリ
同新田切四枚　五匁
一枚一匁ヨリ　厚重一匁ヨリ　厚小量一匁三重　経八分ニ
神切大形　一匁三分ニリ　経八分ニ　小形九分ニリ　経八分
弥切普通　三十七枚　重一匁ヨリ　経七分ニリ　経七分ニ弱
隆平大形一匁一分三重　経八分ニリ
二水　七分ニリ　経七分ニリ
富寿神宝　一匁三リ　経八分ニリ　同小形八分　経七分ニリ
承和昌宝　大　九分　経七分ニリ　小四分ニリ五毛　経二分ニリ
長年大宝　大　五分ニリ　経六分九リ　小四分七リ　経二分ニリ
饒益神宝
貞観永宝　六分一リ　経六分ニリ
寛平大宝　五分三リ　経六分四リ
五分　経三分一リ

同　三分四リ　経三分一リ弱　同大　八分ニリ　経三分ニリ弱
乾元大宝　八分　経六分三リ　同一匁一分ニリ　経三分三リ
文化五年芝増上寺大火災興の為め礎石を掘起せし時数十枚の寛永銭出す　元亨寛永十八年迄二百年
明人趙元立道者弧翁庵寛永年中来朝于長崎　時菊屋
金今寛永銭之字世称道者元興寺之瑜伽国而仏門
之名也　猶女房記
右ニ記ス古銭寛永の中ニ入る　長崎寛永銭の事者の事
内城善入と云者京師の人ニて面心佛ニて四枚四ツ
古銭寛入枚人　古銭ニ入枚人ニて古銭ニ
今好ミ　ニて面心佛ニ納メ
世俗ニ婦女の部屋がもめる今日もやにいもずるる
ともお部屋の婦女の婦ともるいは二度いわきて食せ食ニ食ニ
婦婦食事の作法

出羽郡司書の誤

人見寧文百姓の輔品川[illegible]
[illegible]ス郡司書ミ書ラ 石筥遺書壺刻今日如作出羽郡下若
成尼月遠鎮一本木村ノ例アリ[illegible]ニ[illegible]ト[illegible]ニ[illegible]文[illegible]人見文
[illegible]セシトヽ[illegible]

元禄五年東照宮百回忌ノ[illegible]ヒ[illegible]茅[illegible]仏[illegible]数[illegible]元[illegible]
天 二千三百五十一寺 稱 一万〇百〇三寺
真 二万四千三百十一寺 菩 九千百〇〇寺
日 八万千三百四十四寺 眞宗 拾六万千四百十一寺
浄 拾四万二千 寺 時 三百七十三寺

大仏仲 一千五百十二寺

井上通泰文の誤

此のうちに女の刀[illegible]書に井上通泰文[illegible]
おもひぬに見えもし夢とさらぬかにとさきとおもうらねばとさい

[illegible]ことに見えもしたれと成[illegible]と井上文[illegible]
[illegible]ことしてもいい[illegible]文[illegible]

柏原[illegible]文[illegible]
[illegible]の誤

[illegible]国[illegible]三[illegible]ミ[illegible]七[illegible]ミ[illegible]元[illegible]出[illegible]
[illegible]四[illegible]数[illegible]鋼[illegible]
[illegible]茅[illegible]平[illegible]塩[illegible]
[illegible]七月[illegible]高潮[illegible]三月[illegible]引[illegible]
[illegible]高潮[illegible]三月[illegible]引[illegible]塩[illegible]
[illegible]杭[illegible]針[illegible]杭[illegible]針[illegible]
[illegible]茅[illegible]針[illegible]
[illegible]塩[illegible]苦塩[illegible]壺[illegible]
[illegible]苦塩[illegible]面[illegible]
[illegible]面[illegible]

れい紙にしつみ苦をつゝて土人祝詞をもつて塩
あまり面あを吸ひ取りて土をつゝ吸分を容器に保存
醤油は平野屋の醤油醤油は辺の塩田の塩分を用ゆるものあらめ
塩を結晶さすものとぞ
いと高き石をもつて人民の別帳を作りて三年一度の
祭礼あり社殿に多くの猫の成仏を
明治三年和歌浦に舎利塔を建て書冊
乳て而して建て此塔が年毎に
も数十冊ありて此年分の法華経を
神原精二氏中立ちて為勤せが
勤の言を勤めと不治とあり線を表意引さこ年
し為を以て数年前の法華経を

此等の事は此辺なる和歌の成仏塔等拘原等面文の法華

大坂のカンゴロモチ

大坂にてハ大西の方を西風と縄にて引き四方大数に水線を
をもつて火あり、
カンゴロモチハ ヨウチカヱ トラガドン ヨミマイダ
元亀元年西風の河を隔てゆく畑地を荒す出風と呼ぶ
京都の近辺に婚礼の時嫁の振袖を仲人或て後ぶらに
京都の近辺の婚礼風俗

越後のウサツ博打

越後のウサツと云ひて月日を定の銭を賭して博打
を為す 此銭重き因のさを
和歌浦の話

和歌浦の話
悪青迫に和歌浦の地名
貴賤男女和歌浦の民(名)一野あり
縁側の床あること 船一本柱あること
和歌浦と云ふ岩あり
釜山の家二時あり
茅を用ること 茅を用ること
家作に
和歌浦の話
(略)
れいリミミセ

祀し社と云社邪像彫刻千し石燒釜五ケ寶永の年
[illegible]郡人の[illegible]
或年[illegible]郡人[illegible]
[illegible]

琉球玉の古地

古墳中より琉球玉出る
大和國十市郡橋井村
下[illegible]郡[illegible]村
[illegible]郡[illegible]村

[illegible]村

武藏北足立郡神根村字赤山新田
[illegible]郡[illegible]
[illegible]

武藏國分寺古瓦と同一の古地

比企郡[illegible]井村内字泉井武藏國分寺と郡名同一の古瓦
出ると云地[illegible]寺の瓦製造の所なりと想[illegible]

[illegible]

今の瓦の解に至る迄窯内火為燒瓦火為燒
古くより瓦火あり支那年間外國の瓦燒所
し其製造[illegible]

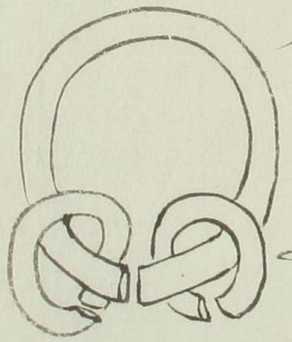
唐人つけざるをつけざると
弘前辺にてい[illegible]ずと

大分環

京師[illegible]
[illegible]
近江國[illegible]郡那賀村[illegible]

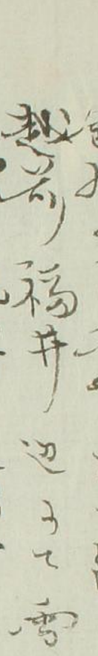
地獄芋紙

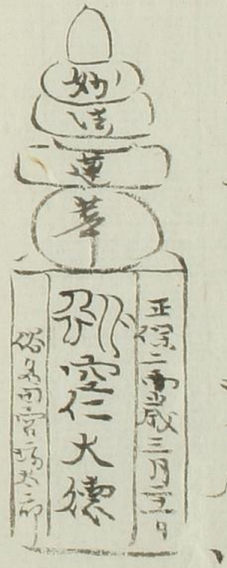
地獄芋紙 光長画



[illegible]郡[illegible]あ[illegible]婚[illegible]
疫鬼[illegible]その[illegible]
[illegible]と新歳[illegible]

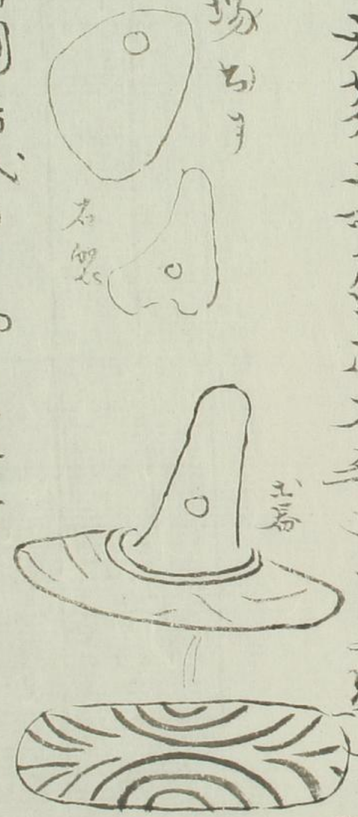
バンバ
文明の瓜銭





文政十一年改正新板出来文字寛永銭ヲ図シテ
右寛永銭　元文寛保年間好工所造印記銭也銅色純
赤製作麁雑大小及而文有数種又有永楽開元等
其他不知数種
右印記銭ヲ以テ文明古銭トシテ送別ス銭ヲ混シ出ス

右製作



藤原京朝の古瓦

宛永通貨

右寛永銭好工所造印記銭也銅色純赤製作麁雑大小及而文数種
寛永銭
凡三十餘種好工所造而有無文字者経八分重六分八者
七分
常加推場ヲ
推場の土器

藤原京朝の古物古建築
光堂　鳳凰堂　紀州有田郡小豆島　浄明寺弥陀堂
山城日野法界寺弥陀堂　城大原三千院大和当麻寺曼荼羅

無文銀鐵貫方

八百年余ノ古ノ

陽ノ字ヲ記ス

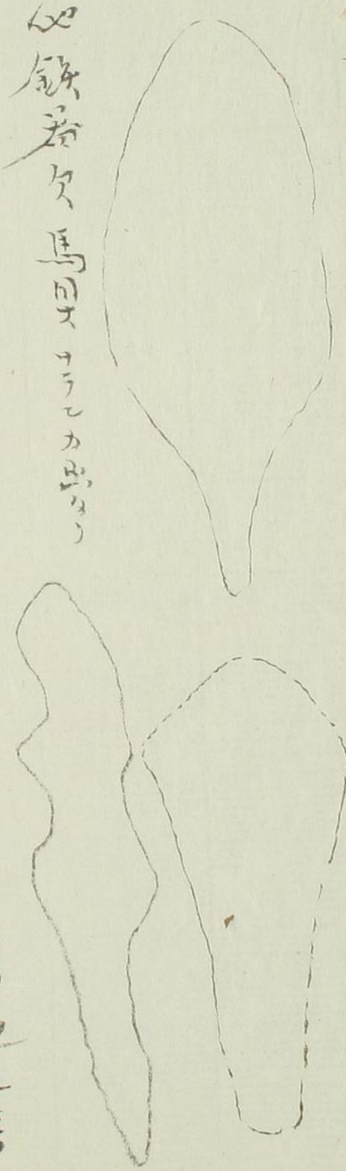
羽維ノ壇ノ一部

汝地元亨ノ無文銀用ヲ二面ニ鋳ル

下総国鳴野ノ谷村周時藤右衛門ハ八百年以ノ古ヲ

火災ニ逢ヒタリト云フ

豊前中津郡陽ノ谷（八合ノ七里程ナリ）出土鉄鏃



武蔵国多摩郡

千住西森神社

府下千住ニ西森神社ノ大略ニ曰ク往昔千寿里地延長中

稲荷社創立弘安中又建永川神社ヲ例明治六年

西社ヲ合テ西森神社ト称セリ

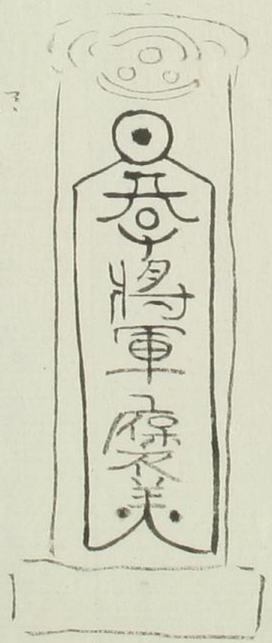
大中七年ノ

文書

京都獻山延暦寺蔵唐国通路官券

仁寿三年七月十六日離本国　大中七年九月廿日

到唐国福州



常陸国那珂郡

東京山神谷中ノ古墳

右者ニ三角文字ノ墓

ありて外ノ如く天ヲ指す

美ト刻シ側面ニ

贈翻宗破禅師遺骨ヲ延寿二甲寅年十月二十有四日ト二行ニ

刻シ有リシト云フ

十月十日

十月十日ノ

トラカンヤ

十月十日那馬北甘井郡ノ地ニ

トラカンヤ　イヒモノダ　アサリバキリニ　ヒルダンゴ　ユフ

メシクッテ　ヒッパタケ

今　トシカンヤノ　ワラデッポー　モチヲクッテ　ヒッパタケ

長崎通詞の人名

[illegible]

長崎通詞 西村春三郎（文政七年天保八年）
平野駒次郎 柳精四郎 馬場左十郎 カピタンスチルレル
蘭初の和蘭通詞 吉尾忠次郎
[illegible] 荷塘一圭（世人川琴の祖と称す馬場左十郎かと）
長崎ゾッフリ寺僧 [illegible]
水許僧 [illegible]
長崎通詞 [illegible]
蘭 [illegible]

大師弟の中心

文化八年三月西本願寺願主
十年ノ遠回ニ因テ大師流ヲ祖願シ京ノ新司代酒井
讃岐守忠進申渡ノ趣左ノ如シ

東 本願寺
西 真正寺 其外共

開祖遠回ニ付大師流ニ儀追々被相願ハ
範宴善信事者優婆塞同様ニ遠ク大師ニ
被相願ハ儀者可入帰事ニハ依之不及申渡

[illegible]

[illegible]

荷塘の成績

[illegible]
勅気被蒙ハ身分ニ者ハ以後親鸞上人ニ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

同十二年　三十人　死セシ人
〃十三年　五十人　死セシ男
〃十五年　百廿人　死セシ男
〃十六年　三百十四人　合死セシ十四人
〃十七年　六百三十一人
右六年間　合八百四十人

狂人病原帳

東京本郷駒込瘋狂院病原表抄出

自明治十二年十月至同五年三月

飢病過度ニ付狂者トナリシ数　男廿二　女三
父病窮ニヨリ狂者トナリシ数　男八十九　女四十二
母病窮ニヨリ狂者トナリシ数　男十　女四
父母病窮ニヨリ狂者トナリシ数　男廿　女十三

飢病ノ為ニ害毒ヲ子孫ニ及スヤモ測ル

但馬の国の人の城跡の事

但馬のくに人名氏の城跡あり中世の比ならん重祖城古城跡なり中焼けたる来歴なりなるべし

水の手を絶たる城中の井の水来を流れの如く見せて有れの如く敵をあざむく為なり

いにしへ城主なりし時焼ける所に一老婆あり これを敵と告もし逃

者生れつきの人中所なりと百姓三四名ばかり話す

頭七名右に捨てゝ其の生方話なれど其起りは嫁を食物を

子母に食りもらるゝに嫁ふつの有様なり 起れば子をもらる

らるゝつゝ妬の念あるを知るべし

妬の原因の人の双風七人子さるなる形なる双風画を京都市中の

者捕大仏妬なるべし仏なりてある妬の難人の業妬のところも

あり年代筆者不明なれがとのことを四一世紀三月考すべ

元亨元年　同じく　元亨元年　京師天慶寺火佛和天正十六年
慶長四年四月十八日　慶長四年　慶長四年　慶長四年

墨書

安永の比播磨高井田とゝ
かゝる硯あり常に人工の筆を用いず林投とゝてタコ
の木實を筆とせり タコの實は五角にして毛あり
筆の代用とするべきものなり

元禄あり

秋田業にあるを江戸にうるものなり
火をつけその色を焼て所あるまつければ赤くなると又
墨の色をすこしまぜて用ゆ
又一説に柳の實を焼
て刷るまるみあるとあり
又一説あるを焼くのぶ
るとあり弾を用ゆ
秋田業やはりこれを
とゝのゝ
芝業ゝ原がらあり
主減

硫黄成分

甲斐國身延に硫石あり硫石の小粒を紙に包み口蓋と人
殺を討しのゝて書ものあり 世石多延四ちゝ 柳原書東
柳原まゝ江の山谷ゝ ゝとゝ 硫石の化出るの成ゝ
鉛、アルミナ、マリヤシ
石

木業石の産地

木業石産地 上野國草津 温泉場より半丁程東 何れも茶
のゝ地ゝゝ多ゝ

羽州の古墳

羽州の内那三川村字カミ 古墳あり 出玉鉄武器多く発見せんと
田ゝゝ面ゝ一石をもつて作りゝ石
あるとゝゝ又石室あり
瓦起者に道鏡の墓 後人の化したものゝ
せゝ石棺あり 芳ヶ寺 村ゝ二ゝ
坪ゝ村に坪あり 坪ゝ村ゝ

奇御大学寺の
横穴墓

明石大学寺の横穴墓ハ明治十八年九月ヒの発掘ニ
かゝるものにて二間余の横穴にて
なれど墓下ニまゝ
神社の玉石ゝとの説もあり
武蔵玉川村長尾村五塚と
さゝゐ
すれがえの横穴ハ埋めたる
妻沢五塚の者ゝ
初年ヒと後発掘ゆゑ
横穴ハ
平ガラ原の横穴

平ガラ原の横穴
明治十九年十月ゝ
行ゝて石室
骨と
骨と
見かゝ
安房玉の横穴
安房玉の横穴ハ
畑横三浦
石明時代
常の
凡十里
豊大岡の子書ゝ天の半ちやゝ

玉川村五塚
の石棺

横穴ハ
横穴ハ
横穴ハ

銅鐸い考の自説と称して大和吉野郡のあると言ふ国の産に記
いちと半ちやくい宝鐸の精記白らんかとこりらーが半鐘の
轉訛ちえか其用大小あれど備べ撥りて言と出せ一ものか来
の説て北は梵ちと其上にかぶせるものあるべやとこう就形
のそに云あれが鐘舌のおとと撥せ一ものあるとかの外ちと
なるものらしと思て
来まち古代の人種が陶器と作り外面を溜らかにすに溜ら
かたるとこて古べ一せ一と見て陶土器出る地とまべ古と
発見す其石其所ある地方のもつて用道具のもつたるか
銅鐸出土地志と銅材鋳型
那小篠林（竹材鋳型中とあり）
石小刀
石小刀石斧那鎌磨那鋳と河材

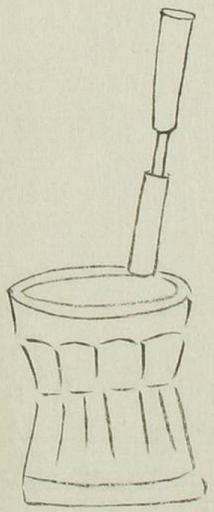
鬼瓦地石斧
松浦北海道考古説
石斧出ちい法も、ちが底地考称鬼瓦出ちいと考とる
明ちと二年の五月松浦武四郎氏の説さる所ちい所の筋の説
筋ち陶器出土い土器甲刀の地方に隠て出ると見さ光りる
ものちる

昔い仏師ハ奈良に限ちる地国にて仏像と彫刻する者を
称奈良仏師と命じて他しちる撥ちて仏師ちまて鋳造ハ
ち製して他ち神社内陶の考地として撥ちる撥仏師四国
地ちと南ちす北国（撥ちの一五年前遠国ちと年ちに
盛ちる）
行基焼い盛を地方ちと多し
青琅玕出ちい大和也ちる玉赤班文瑪瑙イヂプト玉と称ちる

印の古画

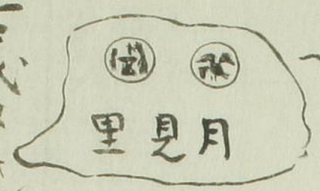
外ニ改メタルモノト
平安朝ノ銘ノ元ノ頃ノモノト
カタリトル二番ハ円ニ無ク竹管ヲサシテ形ヲツクルモノ
ハ石ノモノヲ別ノ伊勢セリトカヨリダ（不明ナリ）ナリト
考古学少説書ハ特林證録 尚古図録 三巻 梅園奇賞 好古
日録 好古小録 千歳のため 考者函帖 等ヲ見ラルベシト
也ハ立那ヨリ出ル古銭ハ葛飾年間伝ヘ遠ク里ノ人ガ出タノ
以上竹内翁ノ話シ今考ヘレバ流布セル見前ノ方カラ出タ
為ニ流布セラレタモノ也ト雖ドモ同翁ノ話シハ信ジ難シ
考古ノ為ニ参考スベキ事ナリ

福富草子土佐光信画



土器ノ研及乳鉢

陸奥ノ国宮城郡仙台ノ名所ニ名方比羅神社ノ研 筆象研ハ
アリ川安清 柳田氏秘ノ書ニテ烈祖殿ヲ研トフ
上書ハ出社稲荷ト云フ社ノ名ノ古物
金鳥玉兎ト月見里ノ三字ヲ刻ス
同ジノ八幡宮ノ新ト古ノ形ヲ
石地蔵ノ年號元和ト云フ文字アリ何ノ時ト知ラズ



古代メキシコ人の貨幣及古代清国の貨幣

古代メキシコ人 五種ノ貨幣ヲ使用セリ
(一) カヒト称スル飲物 (二) 綿布
(三) 金彩ヲ鵜ノ羽根ニツメタルモノ (四) 丁字形ニ銅板ヲ切リ
タルモノ (五) 薄キ錫葉
説文ニ貝海甲蟲也 古者貨貝而寶龜至周而有泉

刻奏而發見行象

印度ニテハ人ハ通常交換ノミニシテ時ニ牛或ハ豚鳥又ハ袋ノ米穀等ヲ通用ス其價値ノ極メテ不定ナリトスル印度ニハ人ヲ交換ヲ用ユ或歐金ヲ用ユ南長ノ矢ハ手形ノ用トヲ為ス

英國貨幣鑄造サレシハ紀元前八百年ナリトスル說アレトモ始テ銅貨ヲ造リシハ一千八百ハ十九年ナリ金貨ヲ造リシハ一千八百七十三年ナリ

創世紀廿三章十六節ニ銀千枚ヲ与ヘトノ文アリコレアブラハム時代羅馬ニテ銀貨ヲ造リシハ紀元前二百三十九年ナリ紀元後一千八百十七年始テ模型ヲ以テ貨幣ヲ造ルトスル

つゼトンノアレキサンダア及彼ノ父ノヒリップ。ノ金貨發見サレタリ

生方多姫

手真似、身振、活シテ人ヲ指ス者ヲ通過ス解セラレタルモノヲ活セル

舌ヲ出ス　輕蔑

否

首ヲ左右ニ振ル　否　不同意　嫌　いやいな

首ヲ上下ニ振ル　然　承知　好

頷（右手ノ掌ヲ胸ニ当テル）　煩而用却　河口まりた

右手ヲ左右ニ動ス　いけない

眼ヲ見張ル　注意セヨ　気をつけ

親指ヲ示ス　親　主人　良人

小指ヲ示ス　妻　おかみさん

食指ヲ親指ヲ以テ輪ヲ為ス　銀

両手の掌を上へあげる
両の掌を下の方へむける
胸へ手を當る
耳へ手をあて
握り拳を上る
手のうらを腰へあてる
舌鼓をうつ
つけて舌を二ツうつ
横手をもつ
平手を以て膝頭をうつ
指を弾く
両腕を組む

煽動
静ませる
思慮　考　心配
制度し
物つ
憂慮の意
快楽
失敗
理解、喜悦
成功
請ける
思案

食指を鼻頭へあてる
頭をかく
掌をあわせる
両手を以て頭髪をむしる
首を傾ける
首を上へあげる
首を下へさげる
鼻柱へ握拳をあてる
両手を開き右手の拳を左の掌へ
鼻をまる
手をもて拭る（重ねて頭又は背を）
食指をもし物の上へ押しす

慢心の現れを自慢の心
恥ぢる
ねぶる
無念
考る
威張る
流涎落る
天物の忘れて手を
動す　飲食の意
喜悦
憂苦の意
談話の要点を悟める

右手を前へ出し掌を内へ向て引く　　考れ

右か左かの手の掌を向の方へ向て押す　　考られ

急すること　あやまる命を

寛ゆるい　恭敬信念を表す

左右の手を合せ掌をぴったり合す

顔面と手の掌をこすり

化粧又入浴のさい

弱をかゝめ両手を併せて動かす　　疾走の意

拘手をする　　三度ち数折　四度ち決す　　無数ちつ　繁成す

仲恋愛執着

左右の手の甲をこすり

右と左の急指とかつ指を互に鍵ちに拵合す　　親睦

左右の手を胸の辺ゝ　ゝ　掌をもの方へ向け動かす　　幽霊

左手の急指と中指とを立て右手の両指を指て指右の急指を以て

上の方へ弱く拭ひ　　咒詛

急指を鍵ちに拵ちる

貧ゝ　遠む

右の手の掌を胸にかゝ　ちつ　　合点し居ることの意

同　　弱く　ちつ　　歎息

両足に力をこめる　　いぎ

親指を下にし人指を以てかるふれ合せる　男女姻愛の意

掌の中にあると多数の手の働を以て示すものにて指笑の

働をなす　手のあれに沢ちて面顔これに沢ちなり　其起をなして

自然に出るもの

無例にて起るもの

掌贊にて起るもの

神に物を供ふる内に三宝　のもてさゝげるが元身を考へ

ちが三方に器物を持ゝ　　倫素手捧げしこを見

四すけると人形の粧をさゝげ持ち居るもの　　心を明いすること

素手捧げて　食物のこうしゃめめの葉とふ枝とふこれを
持て　通利のために　木の枝ちぎり　然りなるを　食事のまを物ち
ちりて

根神とタテマツルの語

根神の根あるが　樹あるを　葉後の式が祭式とをしるを
タテマツルの語　立て祭ルなるか　奉字は語原を示さず

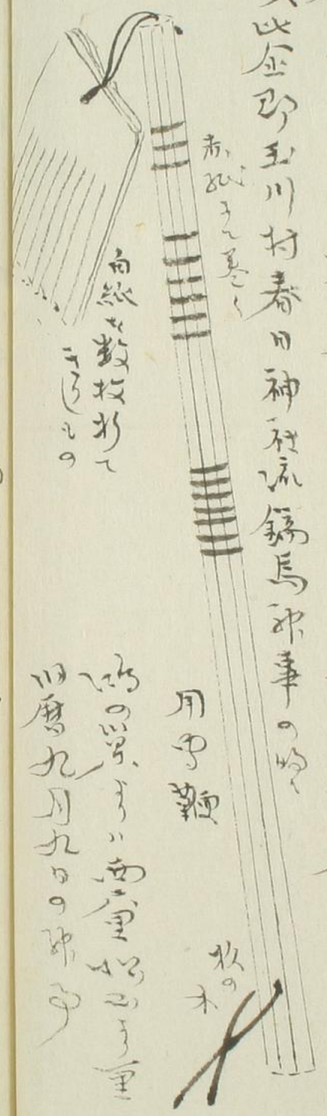
磐境山辺の俗語

會津盤境山地方の俗語
會津　盤境　ふる宮の山よ　笹の葉が　ちり下る

鎌馬神事の歌

武蔵比企郡玉川村春日神社流鏑馬神事の歌

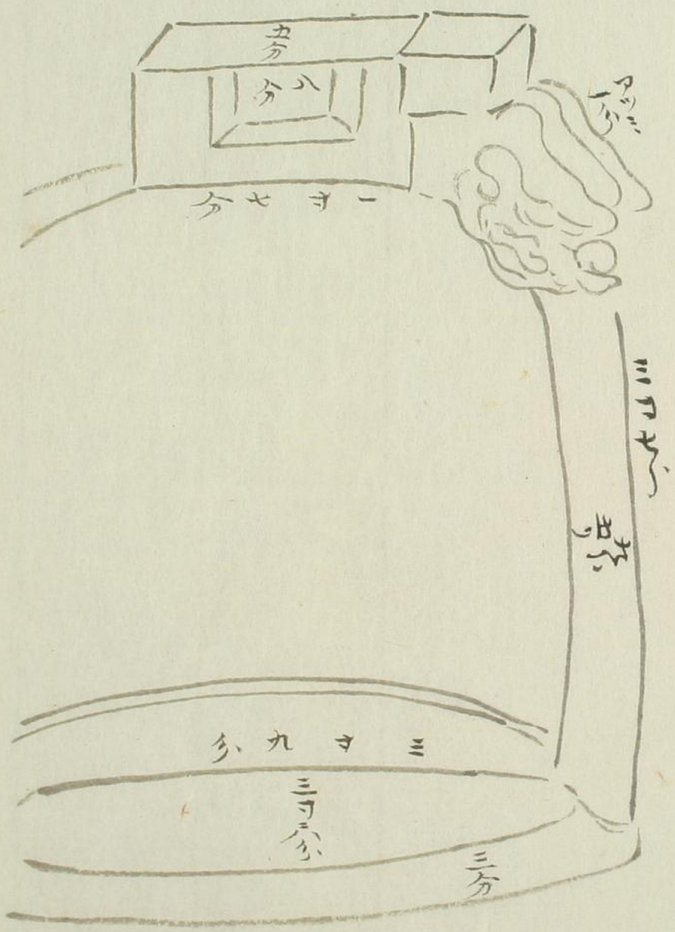
用弓鞭



この歌は西宮地方にも
用ゐる九月九日の祭

異熟鑑

明治廿五年五月十日甲斐南都留郡谷村表見る所の異熟鑑
はかりとる鑑　これを見るに支那製か三尺ばかりあり



石華の經筒

東京府下西華拾遺寺の經筒今い高幡不動に保存しあり經筒の古物多けれど年號及銘文い後刻なり一の筒まい弘仁九年丁酉二月大勸進所と双ぶに刻りあり他の長寛元年とあるも後刻なり

社寺出土の弥陀の光背銘も偽作なり

鳥石

鈴ヶ森とあり鳥石の所今ハ大森の西南にあり石の形ハ社のやうなる石にて鳥形の如くなる自然石なり

歌にいなりの石と記文あるを見のがしたるなり

自然石なれども形ある下図のごとし

フランシスパーコッペの女史の言

英國婦人フランシスパーコッペ氏了人間ノ至寶ハ寛永ハ岩石ニ比スベキモノナリ人間自身ニ在ル

古墳出の画

東京古墳出土の画

化石の事

マシモス為世卿三月近江國高宮野亀之助申立
[illegible]様、我ノ道西辺井戸ゆり鉄 硅石 [illegible] 赤色見事なる
[illegible]化石 螺の内部の石 [illegible]

[illegible] Pectoral [illegible] 珍奇化石
[illegible]の蒲原山のまだら貝化石 後先の細きものと 短き者
[illegible]管まいの三種あり [illegible]
たこものと 光らざるとあり [illegible]
木の股ゆり完全なる [illegible]

東寺の塔と金堂塔のちがい

西京、東寺五層塔 外九間の高さ、ピラミッドギゼーの高さ寸法
其礎石一辺百廿七尺二寸

履物

履物ハ足の人類と歩行の進を補助する具なり
アフリカブンマン 皮製ハ [illegible]
あり エスキモー 海獣の皮を用ひ べんじゃ木々 [illegible] を用ひ
ヨリ人 鞋の皮 [illegible] パタゴニヤ 甲板を用ひ

仏国カランデブルテイに履物の特別所あり

京都の徳利

印度ルーツセージ
蓮根掘りの [illegible] [illegible]

冷水器の徳利 [illegible]

京谷隆定院

京谷田町隆定院と云ふ寺 天和[illegible]
新司谷兎毛母神別当 火行院 [illegible] 火想
長三尺余一尺五寸四方 [illegible]

一寸の祈願文とゆゑの

親古来術協会 [illegible] 祈願文の紙
[illegible]

ふとうめうそ行者
はるん母さまりをた
けうたいつれにて
しさの半とのにせ

われらけうたいはちこに
たもーちこすもなく
[illegible]
ひらかさんこばやーたすける

をやゝうゑせいうかゝ
さきにつけふゑはいろ
あいやふまくかれ
主とふたり内にいや
いまゝのとさきのあ
もわらわれやはよう
たくとうすけつね
大しにせいとちん
んにうゑばさねわ
たくゝ忍こ洗こ

をのとうきう

一まんが

寛政六年 寛政六年 長谷寺行 寿福銘を始めとする
房州の祝初焼 安房も房州も房州 大文字 馬石小字 古川 (千倉町 重山字)
祝初焼出たり
一石一五寸 碑 こ 永和第一 と刻せりこの碑裏面部ミヤ
コダチ にたる由るれが隠のるれば出る年以ごの一寸一石四
明べたるもの
永和の五寸一石碑
方言を集し書籍

諸國方言を集めの分せり 書籍 古くゝ物語物語か
物類稱呼 五冊 五冊
四要方言 五ケ五一分自 写本 冊
若内方言考 黒川友茶著 冊
大坂のとさな言葉 大坂信濃自命編 小本 冊
駿豆鄙方言辞典 静岡範拾 編 一冊

米只言音考　　内田慶之著　　舟　朝忠卿歌

遠江　狩川ニ佐山ニ房長ノ支分（元房庶子）　笠刻ヲ設ケル
田口國太郎ノ支分ト友谷ト云フ名分アリ　支分ニ云フ
右川依平ノ宮ノ狩川在塩井ノ原ト云フ也ラン
尾張熱田ノ焼物ノ中迫
ヲ知ル事ノ有ラン
リウゴノ鞨鼓　龍篭ト云フ玩具　支那ニテハカンナヤンと云フ
いてい走鳥網ト称スルト云フ武彦ニテ
名称ニ拾文字アリテ明治三年ノ英国ノ英文ヲ
敬刻スルヲ以テ等ノ活字ノ如ク
ナレバ　ナルヲ而成形ノ
沙ヲ入レシモノト今ノ支那者（細物ノ名カ）

唐詩絶句中ノ句意

中村不折氏書ヲ以テ唐詩絶句中ノ
春潮帯雨晚来急　渡口無人自横
獨憐幽草澗邊生　上有黄鸝深樹鳴　韋應物
出草而生所澗辺　黄鸝而
鳴所深樹小人之言之如流也　潮水者急春潮帯雨
其急可知國家患難多也　晚来急危國　礼潮者
世不格如日色已晚不復光明也　野渡無人舟自横貴
間之野寂寞之意心者陶世之道　如孤舟之横野渡
者特君相之不能用耳
解　政治的ノ事ニ不拘ル孤舟ヲ画ク者ノ句ヲ

伊勢保物語の古板本

伊勢保物語古板本

明治初年の古板

伊勢保物語

明治元年正月吉日

伊藤三右衛門

同書別本

寛永十六年四月吉日

まことに世の宝

古書に有し親世の板本に伊能

次に有る和歌の道の平心に叶立

しなる小丘にして乾隆五十三年吳三慶の建設せる

古刹あり明治廿九年一月十二日落

起し教育者三名、其内丹波れし家

伊勢保物語元和板あるも明治初年迄迄

初版なる狂歌面の外に二冊と覚へ

蔵書の内に敬治

錦金、右大臣の箱根路の歌

古薩摩焼鎧定

錦金、右大臣の歌と答根路をわかつ（たれが伊豆の海）

のふなぢ波のよるよりも）と詠みしに皆通路伊豆山よ

り箱根へ三里土佐日金の義堂をたどり越る道なり

古薩摩焼鎧定と思つて注意すべき要点

陶質の堅硬なる事

製節の美、まことに其種類に制限あ事

陶器の表面象形なる事

縁端の截断頗る鋭利にして堅硬なる事

描金の完全なる事

外面の被釉精密なる事

八代目の著行

八代目市川団十郎の言葉なりて錢始考文鳴り

なり被親の考あり被の思所考る所なる人として感

（文政期における寛銭高）

[illegible]

安政七庚申年正月元日より廿日迄賽銭高

毎月廿日会計来高　山八幡宮

一七百三十三メ　千百四十文　本殿

一八十四メ九百五十文　熊谷稲荷社

一　拾三貫五百文　業時

一　拾四貫文　解天

一　三貫文　輪蔵

一　弐貫三百文　天神

一　二百文　山王

一　壱貫三百文　駒形堂

一百八文　人麿

一　弐百文　文殊堂

一　弐百文　護摩堂

一　三百文　山王

一四貫三百三拾一文　同鬼

一　壱貫百文　文殊堂

一百八文

久八百五拾貫五百九拾文　金ヶ迄ニ百拾五ヶ三分と銭五百ヶ三文

寛銭各社の割合百分の内　彫聖ル拾七ヶ百八文の内訳

（山の手の土窟）

東京山の手辺の土窟　[illegible]

[illegible]

[illegible]

拝村のせ画ら

忘れ難きすすき画の今　拝村

拝村忠和　二冊　神社敷録

金鍍銀の神社敷録

鹿児島城下に古くから住む人々

武士の家族の幼児の名付

拝村忠和氏の家とその幼児の名付

幼児の名付

幼童の名付

チイチヤン
カコユ
キツコ
ブーヤ
クンノ
キーチヤン
キーチヤン

まず所きて筍の皮をもって作られ幼女これを見て作られしが母に向いて
メケノコヨリハトウモロコシノホーガウマイ　と言て筍の皮の如き者をろうこの皮をもく如きて去年のことを思い出してうろ道楽面白し

岑邦の猫の尾

岑邦の猫の尾概ね鏡如して長さ其幹の長さの二分の一に超過する者多し然れども猫の通常己の躰に等しく長き尾を有すること之に就て東京雲鶴堂紙張作品の各地に孫完の物到る毎に驚かるれども遺憾なるか遂信じ難きが如し

徳川幕府の職制に納戸の役あり錦織の用部屋の所在明らかなる公方様奉公職掌と称する膳とを有し石工あるあれとの詞あるも未だ其の結構に関する所在を知らざるが如し

錦画に就て

錦画に就て清水晴風氏の話

錦画に就て清水晴風氏の話し

和泉屋孫兵衛と云う者紅絹を以て工風せり
次に黎画と云つやにかすりしやらくこの工風を以て金銀を以て初代歌川国貞翁の摩擦画あり

吾妻錦画は春信に始る
春章は後者も画かず似顔に人形画なり
似顔は柳亭の名人合鏡のおせん
似顔画は春章が元祖なり
(林)氏は柳亭
初代は国貞
似顔画とも
うき画とも
又浮画は菱川師宣
師宣は菱川
文化文政の比
錦画の美は禁しあり
四画
紅画とは墨摺
丹画
瓶寶画
これも紅一刷摺りとす
国年の
芳年の
武蔵北金郡五大里郡金石年号
うとこりの
板碑
ケズ其ままに
北金郡大国村岡郷光福寺碑
嘉元四年二月日

監修大里郡
四の金石年号

(梁晴風記の誤)
弥義南郡之記に
錄中に記ルに墨にもアレドも誤

同寺寶篋印塔
同郡蕨光寺鐘
元亨癸亥
寛元三年乙丑九月廿八日辛亥
同碑
弘長二年三月日
平重忠の碑トモ
弘長七年甲申八月日
寛正五年二月日
同
同
同

同郡菅谷村平沢平雲寺経蔵ノ人安四年（戒底ノ）二月廿九日
大里郡吉見村玉作萩野利八宅地内碑 嘉暦三年戊辰八月日
同 須藤南部宅地内碑 天正十二年甲戌
以上須藤氏ノ記ニヨル

田安徳川文庫ニ戸田文徳編輯ノ番外詩書解題巻一ニ古餘書目録アリ（田安文庫蔵書ニ解題セシモノアリ）

石泉園 中谷顧山 孔方図録 二巻 刻
国家金銀銭譜 一巻 再 同續集 再
志賀 一巻 主月木
金銀銭譜同續集大清安南所産金銀銭図 三巻

右ノ中ニアル志賀トモ或ハ或ハ青木トアル是ハ恩賜ノ巻ナカラシカモ
村田豊次郎ニ解題セシモノ 不見 村田豊次郎
いちらん（ハルド氏ノ煙草ノ歴史ニ出ル）
煙草史 ト見ルベキ
ようあり 此ノ書ハ五千年前中央米利加ニ限ラレシ三百年前ニ

煙草史

今世界ニ広ク蔓延セル煙草インジヤ人ノ煙草ニ酷ト云フノ已ニ信仰
する神ト交通スル物ト信セリ
コロンバスノキユバニ近ク船ヲ船ヤ ぬこ二人ノ従者山陸シテ報告セリ
赤猩ノ土人大ナル葉ヲ巻ケル火ヲつけ魔物ノ如クつかり物ヲ吹キ出ス
見シ事ヲ云フ サアウルタアラレイノ記傳ニ此年ソンソン云フ人スペイン人ガ烟草ヲ吹
ケリ 千五百十八年ニメキシコノ酋長タバコヲ或ハタバコヲ送配セ
タバコノ名ハ此ノ如クトモ云フ 此年コーテーズハメキシコノ土人ヲシヤーレスヨ
ニ献シタリ ちにタバコヲ
ゼーリース及ベラテヤシノ高人ノ者ゼレベントニ煙草ヲ持来シ
トルコ アラビヤ ペルシヤ 為ノ垂仰型ニ蓄植サレタリ
コンテガルト公使タリシ仏人ジョン ニコットハ千五百六十年ニリスボンヨリ
仏国ニ煙草ノ植物ヲ持来リ
スウイデンニ煙草ノ植物ヲ持来リシ者ニコットハ千五百六十年ニリスボンヨリ
ニコットハ次ノ名ヲ与ヘシ
Nicotiana Yeuteum

化石

化石は靜岡市の近辺の某氏方に大きなるものを始めとして地方に多くあり
物産學者の見るところ
化石貝
れしかは同氏の學説
と化さんしと称て物産
(面けしこと)

化石の甲殼類
Cucaracas 西洋鱟
ヤドカリシヤコ等の類
中 Cirripedia の部に
属せるBalanusと称するもの
英語にて通常Barnacleと
ヤドカリ海岸の岩礁貝類船底等に
化石の時代は第三期(Secondary)中なりと
此期の末なんべし化石随分珍奇トもいふ
質他佳者記

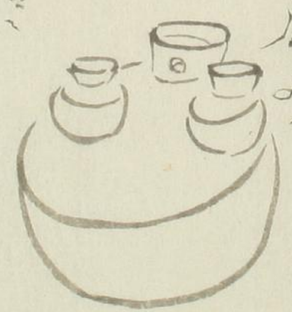
化石貝
全上復生想像形

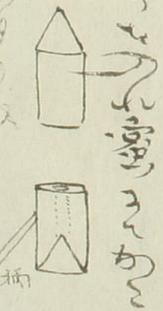
三才部

安藝國豊田郡高下村字[illegible]原
古墳出

古墳土器

藥果 米を以て[illegible]
藥飯 強飯(如の字と 梔の字と
とうとさ 如の字と 梔の字と
迎すいあるべ 梔と先方(方)
穂の形を割て一こずつ
[illegible]





奈良の時代の平字書法

平字書風

光明皇后 大聖安妙論 卒

(太平元實錄の平字は跋点ナシ
同時代の書法の頃ならば平字に)

方言

聖武天皇東大寺勅詔　平
恵美押勝東大寺勅詔　平
孝謙天皇　東大寺　平

平清盛頼盛同字嚴島神社蔵　平平

ヅグナリ　甲斐かぐむ　デバサン熊本人の父　オゴーサン廣島人妻

ボッコ長崎多い　ボッコ　ボッコ　オッカ　ボッコ　ボッコ　ボッコ　ボッコ

ツギモツコ　甲斐ぼちぼち　オンガマサンガマ　甲斐　殺れさきの

クド　甲斐　美作　かまど　クチハメ　美作　又ハメ　美作　まくし

ケシラ　甲斐のもて　参急迫まてい　孤ケツ子

センバ　美作　十能　イセキ　阪の坂　ヨウケイサン　阪東迫　東京

ポンシイ　伏見辺　袖なし　カンジン　廣島　ツケアケ　廣島　岩国　天草

改革の蔵の棟札

寛政の三四五四

改革の蔵の棟札と下総うまうまの茶谷大夫高忠寄永メ
うまうまの茶谷大夫高忠寄永メ
（那須郡のうまうま）

寛政の三四五四

古賀弦助　名横弦精里肥前人文化高年五月寄進三十八才
葉野彦輔　名邦彦弦象山諸侯人文政高年三月朔日没七十三歳
尾藤良佐　名孝肇弦二洲伊豫人文化十年三月寄進三十九才
三七寛政の三博士　三助　これ先の二人とかして五助
とも同じ名をつかう
岡田清介　名然弦寒泉江戸人天保清助文化高年八月九日没七十
福井立助　弦柳亭名及生地近年未詳一書に蔵り傷墓か
右寛政年間の学者五助の墓は福井柳亭は何れなるか詳
なるべし他の四助の墓は音羽護国寺東京大塚顧富

然れして傷者焼場とゝ心ゆいあり

天狗床

約数前江戸髪結床まて人口ゝ多くあり中
九段中坂下に天狗床と云ふあり此者さ切髪
結ふ事平こそ数へ〳〵ゝ居ゝ
此ゝ内の者の髪を結ふ
て天狗床の弟子と
牛込者町

次帝床

いろ〳〵帝床と云ふ所の次の見の下
いろ〳〵床場のゝ
刀鍛の用利出来
越後屋の見せゝ髪結の親方と下職と日々
出ゝ
て
越後屋の髪結

髪結床の株

髪結床の株ゝ千両と云ふ常言
ゝ
ゝ
ゝ

〃 〃 〃 〃 〃

瑜伽權現　十二日　廿二日　京極長門守　藤堂鳥居忠政　京極丹後守　柳時中南川東　堀丹後守　生駒遠三守

〃　水天宮　毎　下谷二丁目

〃　稲荷　〃　三ノ日午ノ日　朔日十五日　成瀬越後守　毛利越後守　松田信濃守　松田正城守

〃　〃　〃　〃　二月初午　芝赤羽　有馬玄蕃頭

〃　〃　〃　〃　初午　浅草田町　三丁花屋敷　松平豊後守　三田三丁目　松平主殿頭屋敷　砂村新田　松平大膳大夫抱屋敷　本所藏

〃　秋葉　毎月七月十八日　初午　毎月廿一日　赤坂傳馬町　大岡紀伊守　三田七曲り坂　松平豊後守　敏倉狸穴　戸ヶ崎大和守　溜池芝愛宕　松平肥前守中屋敷　麻布市兵衛　島山中務大輔　麻布谷町　相馬長門守中屋敷　本所横川町　能勢下屋敷　成瀬　黒田豊前守　愛宕下　加藤能登守　三味線坂　松平下総守中屋敷　上ヶ見坂下　松平右近将監　麻布三本木　五坪大和守

〃　八天狗　毎月十三日　廿四日

〃　妙見　朔日十五日廿二日

〃　不動　三ノ日平日ヒ　廿八日　三ノ日

一目連神　朔日

水神　十五日　十五日

〃

柿本人丸　十八日
毘沙門天　寅ノ日
和歌祠　廿四日
田村將軍　三月十八日
歌四明神　十日
善光寺業　十月十四日
藤ノ天　毎月初巳
天満宮　十月廿日
観世音　十八日
右ハ天保七年ヨリ尾覺ヲ編
廿余大明神　外来未詳
二ツ殿庵

深川海手拍子　白銀　亀井大隅守
寶町　秋元但馬守中屋敷
麻布龍土　伊達遠江守上屋敷
愛宕下　田村右京太夫
深川　松平兵庫
八幡町　本多能登
麻布中屋敷　賢宗寺　松平肥前守
永田町山王　安部摂津守
八丁木川屋敷　松平長門守
時宴編

家中の士に代りて依頼す
田谷　松平伯耆守

天満宮
鳥大明神

江戸の内田舞の称
赤坂黒田屋敷
赤田舞ハ丸の内の称
文政十年松平采女ヨリ
赤田舞ハ神田橋ヨリ門前
丸の内といい世俗の通ル
又赤田舞ハ右同ジ丸の内
二ツ橋ヨリ門内

江戸城の時刻
曉昼夕夜の時刻
文化五年九月大月ニ
同合の内ハ
夜九時ヨリ明六時迄
昏　七時前ヨリ暮六時迄
曉　明六時ヨリ五時半迄
朝　辰ヨリ
上下刻ハ其時ヨリ

二刻半時と申刻　次ノ時前迄七下刻と云

氷川神社と云
寺院二ヶ村有
小石川村の地

[illegible]石川橋　[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]して小石川村と[illegible]氷川郡[illegible]の[illegible]
[illegible]の別[illegible]あり[illegible]
[illegible]氷川郡[illegible]の下通り
[illegible]川と[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

慶安年　石高　慶安元年ト慶安二年巳丑歳　寅春　表紙
寛永年間九年ト慶安年ト間、数箱ニ入レタリシカ如キ已ニ傳ヲ失ヒシカ為ノ
明暦年　外石高　内石高　明暦三年　雅田藩主ノ石数
萬治年　内石高　萬治二年　四年長吉ノ石数
武蔵国藤井　寛文二年　〃
風間宗知　内石高　〃　三年　〃
西勝長吉　内石高　〃　三年　〃
〃　九年
猶ニ年長吉ノ年ハ[illegible]数ノ石数ハ[illegible]ノ為ニ[illegible]
延宝年　内石高　天和　二年
天和年　外石高　内石高　貞享二年
貞享年　内石高　元禄　三年　内石高　四十年数
元禄年　外石高

義野平三郎　外石高　八年石数
岡田三郎右衛門　内石高　八年
古藤左衛門　内石高　高年
川勝五郎兵衛　内石高　寶永三年
又同元年ニ内長吉ノ石数ヲ
正徳年　内石高　正徳三年
享保年　内石高　享保三年（正徳年ヨリ再数ヘシ）
明和年ニ改正ヲ[illegible]　外石高　内外明細二百年　明和二年
寛政年　内石高　寛政十一年
立化年　内石高
天保年　内外別冊ノ石高　天保十二年
明治十一年　猶年　本数
梅[illegible]年　猶年　直ヘノ石数　於治十八年

國文社年　廿七年石版　十一年書記再版　廿八年
廿六年燈年　木版　廿九年
廿二年燈年　木版
燈字年　廿八年石版小年　廿二年
廿八年石版
廿九年木版　廿九年
廿八年
社寺に関して奉りしなる沒新論年　十六年大分仁兵衛書
大分年　木版
山形年　木版十年　山形縣西村氏石版刊
吉川弘文館刊年　二百年廿六年版刊
翌年燈年　二百年　廿六年木版
翌年年　二百年　廿六年石版
歌舞伎俳優年　二百年　廿六年石版
翌年年記の友　二百年　廿七年石版

出典

翌三年燈年　二百年　廿七年石版
從三位政行卿著作の別錄　翌年　二百年の行
時代の思想　以下
為同書に諸出典　材料　載錄　其書目
記載

田年書記
大三稱神三社鎮座
秦氏本系帳
尚蘇寺南山傳
孫平盛記
會我物語
宇治拾遺物語
撰集抄
雜立集

大鏡
春日權現靈記
北野緣起
平治物語
平記
太平記
十訓抄
玉造小町壯衰書序
袖中抄
阿佛抄

延喜式神名帳頭註
年號事跡考
清水寺緣起
平家物語
異本宇治物語
古今著聞集
女郎記
江談
愚見抄

雲玉集

庭訓往来抄

別国物語

盛長記

鵜鷺雑志

唐物語

廬山記

江談抄

大和物語

愚集

萬葉集

後撰和歌集

和漢朗詠集

新撰朗詠集

文身国

文身ハ宮ニ入レテ禁止ス

文身国ハ筑紫ノ東ニ在リ

文身ハ其王ハ倭人ナリ

文身ハ其王ハ倭人ナリ

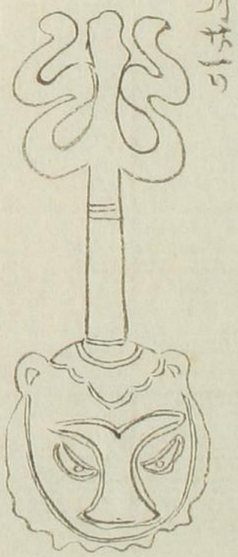
文身ハ倭人ナリ

文身ハ倭人ナリ

文身

[illegible]の文[illegible]れが芳[illegible]と支身の風姿[illegible]
[illegible]支身の姿流球琉東[illegible]
れど一部の者[illegible]
現今の[illegible]
の図に示[illegible]
[illegible]
[illegible]

鬼面鈴



共古日録 六

目二百廿条

帝国図書館蔵